第54回日本生殖医学会 総会・学術講演会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高, 栄哲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20645

『学会開催報告』

第54回日本生殖医学会 総会・学術講演会
The 54th annual meeting of the Japan Society for Reproductive Medicine

金沢大学医薬保健研究域医学系　集学的治療学
（泌尿器科学）
高　栄　哲

2009年　11月22日(日)，23日(月) の両日にわたり，第54回日本生殖医学会総会・学術講演会を石川県立音楽堂，ANA クラウンプラザホテル金沢にて開催いたしました．

本学術講演会は，わが国における生殖に関与する，医師，技術者が一同に会する最も大きな学術集会です．本学会は「人類および家畜と動物の生殖と資質の向上に関する基礎的および臨床的研究について，研究業績の発表，知識の交換，情報の提供などを行ない，もって学術の発展と人類の福祉に寄与することを目的とする」としています．全学会員数は約5000名であり，昭和31年に設立された伝統あるある学会です．

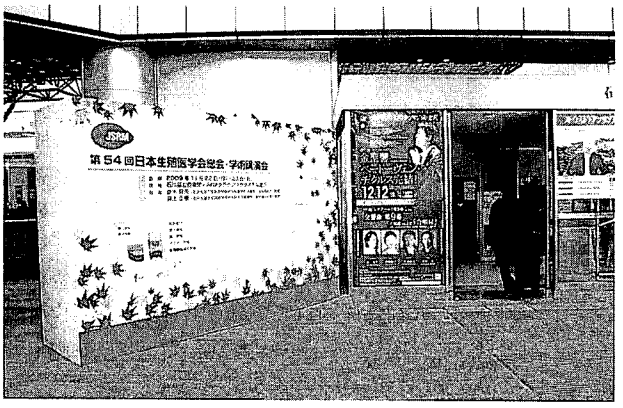
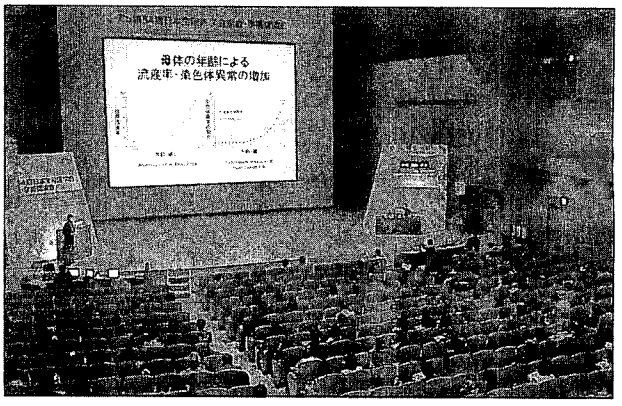
金沢で行われました今学会は，泌尿器科と産婦人科とが共同して企画，運営する共同開催であり，初めての企画でもあります．共同開催をアピールすることもあり，「生殖医療－男と女のハーモニー－」を学会テーマとしました．いうまでもなく，生殖は男と女の協同作業であり，生命体にとって必須であり，その生殖行為は，雄性 (男性) と雌性 (女性) のハーモニー (調和・和合) によるものと考えられます．しかし，昨今の社会的変化 (晩婚化，低婚姻率，少子化) および医学的進歩 (生殖補助技術の進歩) により生殖医療自体が大きな変革を遂げようとしています．我が国では，すでに生殖補助医療で出産した子供は毎年の出生数の2%近くを占め，生殖医療が日常診療として定着しています．とくに，生殖補助技術は細胞や組織の冷凍保存技術や胚芽，配偶子，生殖臓器を凍結保存の進歩により，自己のみならず自己を超えて移植が可能となり格段の進歩を遂げています．今回の学術集会の視点は「男と女の協同作業」であり，様々な講演を企画しました．

特別講演は再生技術の最先端をヒトに近い，サルからアプローチした「生殖・再生医療研究におけるサルの有用性」であり，滋賀医大・動物生命科学研究センターの鳥居隆三先生の講演がありました．外国からお招きした先生の招請講演は5題あり，Ovary Transplantationについて，米国のセントルイスのInfertility Center of St. Louisの Sherman J. Silber 先生，Endometriosisについて，シカゴのNorthwestern University Feinberg Shool of MedicineのSerdar Bulun先生，ギリシアのIoannina University School of MedicineからNikolaos Sofikitis先生の「PDF5阻害剤と生殖」，元韓国生殖医学会会長のJae-Seung Paick先生から，精索静脈瘤の最新話題，またイタリアのフィレンツェ大学のCsilla Krausz先生からY染色体と不妊についての講演がありました．

教育講演は「産婦人科専門医から見た男性不妊症」の吉田淳先生や「男性不妊とその要因」の宮本敏伸先生から男性因子，「生殖生理とアロマターゼ」の生水真紀夫先生や「多嚢胞卵巣の形態形成における内分泌調節」の森崇英先生から女性因子，また吉村泰典先生から「生殖医療管見」を倫理面から，さらに基礎から「生殖腺の発生と性分化のメカニズム」の諸橋憲一郎先生，要望講演として加藤修先生の「最先端不妊治療の現状と将来」の講演がありました．

シンポジウムを中心とした実践的な講演では最先端の先生をお招きし，「第三者配偶子を用いる生殖医療」について，倫理的側面からの討論，「癌患者と生殖医療」や「婦人科がんの妊孕性温存治療」にみられる癌患者における妊孕性の確保，「低侵襲性排卵誘発の有用性と問題点」などの実践的な話題と討論，「男女のせめぎあいのgenomic imprinting」と題したゲノムからみた雌雄の葛藤，「～男と女の性～」は生殖と性のタブーにまで踏み込み，学術的に議論できる場を提供できたと考えています．

さらに，エンブリオロジストを対象にしたレクチャーは，「現代ARTの展望：ICSIの原点に返って」や「未来ARTの展望：生殖細胞の創生技術の最近の進歩」において，実際の生殖技術の討論および最新情報を共有できた．教育セミナー (ランチョンセミナー) はいずれの会場とも，多くの参加者があり，盛況でした．

今学会の一般口演演題数は，155題であり，例年に比べ倍の発表がありました．さらに，ポスター演題は209題であり，座長をおかず，各セッションで十分な意見交換を企図したところ，十分その意が達成された印象です．

最後に，本学会を成功させるために，企画の段階から北陸地区の生殖技術系病院に多大な支援を頂き，また金沢大学の多くの皆様からの意見をいただきましたことに感謝申しあげます．